

SIGMUS 第6回 研究発表会 質疑記録

1994年5月28日 京都ドイツ文化センターホール

(1) Virtual Performer におけるセンサ系と音楽情報の処理

片寄晴弘, 金森務, 長嶋洋一 (LIST), 志村哲 (大阪芸大), 井口征士 (LIST)
記録: 金森 (LIST)

Q: 平田 (NTT) システムの安全性, 可搬性を前提に作品を作っていたとしているが, 具体的にはどのようなことをおこなっているのか.

A: PC-98 で行なっているセンサ処理部のユニット化を進めている. 今回については, 無線部を使わないようにしている. その他の工夫については発表で述べたとおりである.

Q: 平賀 (図書館情報大) MAX オブジェクトの画面レイアウトは自動的に行なうのか.

A: ユーザが決める.

(2) 撥音 / ん / の周波数降下の高さの知覚との関係

渡辺守, 山田真司, 中山一郎 (大阪芸大)
記録: 金森 (LIST)

Q: 長嶋 (LIST) 自分の経験からは後続音の音程が実験の結果に影響を与えると思うがいかがか.

A: "ん" が十分に持続する音楽を対象にしている.

Q: 大串 (京都市立芸大) プロの歌手は "ん" の所をピッチを上げて歌うのか?

A: 経験的にそうしているようだ. アマチュアではよく経験する.

Q: 大串 (京都市立芸大) ピッチの問題を考えると, 高周波成分が重要だという話があったが, それならば, 母音と母音の関係で調べてみるというようなアプローチはいかがか?

A: 実際にそのような研究は行なわれている. 母音 + "ん" の歌い回しは日本の歌唱に独特のものであり, そのような研究自体がオリジナリティにつながっている.

Q: 田口 (甲南大) "ん" が延ばされる音楽は実際には少ないと思うが, そのあたりについてはどのように考えるか?

A: 日本の音楽を対象にしている.

(3) 音楽認知研究の諸問題

平賀譲 (図書館情報大)
記録: 金森 (LIST)

Q: 片寄 (LIST) レールゲールらは一義性・最善性に固執しているのではないと思うがいかがか?

A: 理論のある面は多義性(というより多次元性)を反映しているが, 全体として1つの解釈に収束させようという意図が強い. 少なくとも多義性を積極的に扱おうという枠組はない. ポリフォニーは最初から適用除外されている.

Q: 竹内 (亀岡高校) 曲自体が多義的といっても, 作曲者の意図は1つに集約されるのではないか?

A: ここで言う分析のレベルとは異なるものだと思う. このレベルの多義性は, 作曲者が意図的にいれている場合が多い.

Q: 大串 (京都芸術大) [モーツァルトの K.331 に2通りの解釈があることに関して]マイヤーは K.331 の分析のどちらかを良しとしているのか?

A: 竹内 ヘンレ版を良しとしている. しかし, プーニン はペータース版的な演奏解釈をしている.

A: エルガーの変奏曲などもペータース版的である.